

239 花井卓藏君

〔法学新報〕第十九卷六（三二二）号

明治四十二年六月一日

○花井卓藏君 今回法学博士の学位を授けられたる我中央大学  
學員にして講師たる花井卓藏君は予と同窓の友なり公私交を訂  
ふ茲に二十有五年情交最も篤し今や光輝ある月桂冠は君の学殖  
を表彰し併せて母校の光彩を爛發せり同窓友人の歎ひ何物の以  
て譬ふべきものあらんや今君か経歴の一端を叙して學員諸氏に  
報するは予輩職を母校に奉する者の当然の務なり

君か優贍の成績を以て英吉利法律学校の業を卒へしは実に今を  
去る二十年前乃ち明治二十一年七月にして君未だ成年に達せざ  
りき同三十一年七月東京法学院高等法学科を卒業し学士の称号  
を得たるは君か公人生活に入りてより九年の後にして老書生と  
して君の最も勉強したる時代なり其代言人試験に及第し標準点  
を得て第一位を占めたるは明治二十三年十二月にして同三十一

年八月鹿を中原に争ひ衆議院議員となり憲法法律の専門政治家として重きを院中に為せしは世人の周ねく知る所なり君は篤学の士にして憲法行政法国際法等の公法に最も多くの趣味を有し内外の載籍殆んど涉獵せざるはなし而して其弁護士となるや一身を刑法に委ね刑事弁護を以て一世を風靡せしは趣味の發展にして又実に今回の光榮を担ひし間接原因たるへし予輩か君に敬服する所は其読書癖なり繁忙なる業務の中に在り苟も新著と称するものあれば之を読破し枕頭常に手卷を積かす二十五年一日の如し若し夫れ雄弁と健筆とは君の天才にして頭腦の明と応用の才とは同人の均しく嘆稱する所なり如此にして弁護士会及び衆議院に異彩を放ちし君は明治三十九年六月挙げられて法律取調委員となれり刑法、刑法施行法及監獄法の起草委員として主査委員として熱心以て力を立法事業に竭せしは今回の光榮を荷ひし直接原因たるへし而して現に刑事訴訟法主査委員兼起草委員たり先是君は我大学の事業たる大審院判決録法理精華法学新報等の編輯を主宰し増島会長の下に訴訟実習会の副会長となり奥田会長の下に辞達学会の副会長となり其他学員会の理事となり評議員となり校の興隆を助け母校の爲めに尽せし功勞も亦決して没すへからざるものあり嗟君二十にして弁護士となり三十にして代議士となり四十にして博士と爲る私立学校出身者としては真に成効の模範と云ふへし予輩同人豈に慶賀せざるへけんや(辱交佐藤正之記す)